取材・文／中谷琢弥　撮影／林川　淳

KMF2008
Kyoto Music Festival
@ METRO·Lab.Tribe·世界 -WORLD-

3daysは暴挙か、新たなスタンダードか
レコード更新、京都系フェスのトドメ

お祭り騒ぎの華やいだフロアや街に身を置くことで、その狂騒を尻目にじゃなく、それに参加／体感しながらも一方では思いを巡らせている自分がいた。以下はすべてKMFの時間のなかで感じたこと、なのだ。

「METRO」「WORLD」「LAB.TRIBE」、KMFのメイン会場となる3つがそのシーンの中心にあることは確かだ。大阪のクラブと比べてみた場合、やはり客層の違い、を大きく感じる。もちろんブッキングの仕方も異なるけれど、それはたいした要因じゃなかったりする。京都のオーディエンスはクラブ遊びに対して純粋だ。「同じメンツを大阪でやったとしても良い意味でも悪い意味でも水っぽくなる」とは「WORLD」・プロデューサーの言葉だが、まさに。それはいわゆる中心（という物言いは好きじゃないけれど便宜上。ここでは東京でも大阪でもいい）から外れているから、でもあるし、街に流れる遊び方の違い、でもあるんだろう。

さて話を本題に進めよう。結果から言うと、今年もKMFは大盛況。4回目を迎えた今回は、初の3日間の開催という無謀なチャレンジを敢行した。「伝統とは革新の連続である」という格言は、こういった挑戦を仕掛ける京都にこそ似合うし、けれど実際にそれを実行するには熱量、力量、度量がハンパなく必要になってくる。その意味でも素晴らしい。

初日をヒップホップ～レゲエ、翌日をハウス～テクノを軸にしたダンス・ミュージック、最終日をロックなライブもの、と日によってカラー分けしたのも変化した点だ。これまでのごちゃまぜブッキングだと、いろんな種類のお客さんが混ざる、という面白みがあったが、今回の試みでは遊びやすさや一体感が増すことになった。

驚いたのはメイン日となった2日目の前売りプレイガイドが1200枚以上動いたということ。過去ダントツというこの数字は、（それがフェスという形をとっていたにせよ）関西のクラブ・イベントでは快挙と言っていい。楽しい夜を求めているのか、お祭りごとに引き寄せられただけなのか？　結果、